

平成 21 年 5 月 31 日現在

研究種目：特別研究促進費

研究期間：2007～2008

課題番号：19900004

研究課題名（和文） 中国における対日歴史認識および歴史研究動向に関する緊急調査
- 政府間共同研究・首脳交流を受けて -

研究課題名（英文） Study on China's recognition of the history: the Sino-Japanese War

研究代表者

加茂 具樹 (KAMO TOMOKI)

慶應義塾大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：30365499

研究成果の概要：近年の日中関係は、日中間の歴史認識問題をめぐって対話可能な環境が整いつつあるきわめて稀な「凧」の状況にあるとの認識のもとで、(日本に利用可能な)日中戦争に関連する歴史資料の調査及び収集をすすめ、また同時に日中戦争や日中歴史研究に関する対話のプラットフォームの構築をおこなった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	15,300,000	0	15,300,000
2008年度	18,200,000	0	18,200,000
年度			
年度			
年度			
総計	33,500,000	0	33,500,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：日中関係、歴史認識、日中歴史共同研究、対日賠償、南京大虐殺

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初(2007年)の研究の背景(緊急性)および学術的背景は以下のとおり。

研究の背景(緊急性)

(1)2007年の重要性

2007年は1937年7月の盧溝橋事変および12月の南京事件から70周年にあたる。こうした記念の年には、中国で歴史問題に関するイベントや宣伝が盛んになり、反日感情が高まるのが通例である。

しかし、中国政府は2005年4月の反日デモ以降、それが大規模な反政府デモに発展することを恐れ、民衆の反日感情を煽るような政策を避け、対日関係の改善を模索してきた。

昨年10月の安倍晋三首相訪中の際に戦略的互惠関係の構築が合意され、日中歴史共同研究も開始されたが、このような中国の意向も背景にあったといえよう。

(2)両国首脳相互訪問と歴史認識問題

また、本年4月12日、来日していた温家宝総理も国会演説で、「中日国交正常化以来、日本政府と日本の指導者は何回も歴史問題について態度を表明し、侵略を公に認め、そして被害国に対して深い反省とお詫びを表明しました。これを、中国政府と人民は積極的に評価しています」と述べ、中国首脳としてはじめて日本の歴史問題への取り組みを肯定的に評価したのである。

(3)対話可能性の(暫定的な)向上

このように、日中関係は本研究開始当初、きわめて稀な「凧」の状態にあり、歴史認識問題にとっては、初めて対話可能な環境ができています。しかし、この状態は、2008年の北京オリンピック、2010年の上海万博を前にして、国内の政治運動と直結する歴史問題に関するガヴァナンスを得ようとする中国の意図に基づくものであり、長期的に継続しない。我々は、この好機をとらえ、今後も継続して生じる日中間の歴史認識問題への対処に学術的に必要な資源を、中国側からの譲歩を引き出しつつ、得ていかなばならないと考える。

(4)東アジア各国で進む歴史認識問題への取り組み

他方、中国は対日賠償請求の準備のための聞き取り調査を進め、満鉄、強制連行、日系企業の文書を重要史料として位置づけて、整理や解読を進めている。台湾も、文書の収集、整備を急速に進めている。東アジア諸国・地域が、歴史をめぐる議論に備えている。日本もまた、こうした準備が緊急の課題となっている。以上が、この共同研究が特に緊急に求められる背景である。

学術的背景

以上の研究上の背景(緊急性)を踏まえ、本研究の学術的背景は以下のとおりである。

歴史認識問題については、これまで三国歴史教科書や劉傑ほか編『国境を超える歴史認識』(東大出版会、2006年)が刊行されるなど、東アジア共通の議論の場が形成されつつある。しかし、小島朋之『崛起する中国：日本はどう中国と向き合うのか?』(芦書房、2005)が明らかにしたように、大国化する中国の共産党は自らの正当性を絶えず調整しており、特に2008年から2010年に大きな変容があると予測される。また、日中政府間の歴史共同研究が2006年末から始められたことで、学術の成果と知恵を、歴史認識問題という現実問題にいかにかし、和解に至らしめるのかという課題が突きつけられている。

2. 研究の目的

以上の認識を踏まえ、本研究の目的は以下のとおりである。

日中関係が近年きわめて稀な「凧」の状態にあり、日中歴史認識問題にとってはじめて対話が可能な環境を作り上げることが可能になったという近年を「好機」ととらえ、日中関係の歴史研究に必要な環境を構築することを喫緊の課題とする。本研究を通じて中国側に働きかけ、また中国側から譲歩と協力を引き出し、(日本に利用可能な)日中戦争や日中歴史研究に関する情報や資料の収

集を試みるために、同問題に関する対話のプラットフォームを構築する。

また本研究はこの歴史共同研究の補完的役割を担うものであり、相乗的成果を上げることができると確信する(政府間の歴史共同研究の日本側メンバーとして小島朋之、北岡伸一=委員、服部龍二、川島真=外部執筆)。

3. 研究の方法

本研究の方法は以下のとおり。

(1)日中戦争関連貴重史料の収集とインタビューをおこなう。

まもなく閲覧不能となる可能性の高い資料、朽ち果てる可能性のある文書をマイクロでの保全を視野に入れながら、緊急的に中国に所在する史料の現状を把握し、その調査および収集をおこなう。また発言不能となる証言者に対するインタビューをおこなう。

(2)歴史認識それ自体への取り組みに関する調査をおこなう。

主要メディア等における中国政治、日中関係の動向に関する調査を実施し、中国の歴史認識をめぐる諸言説に対する理解を深める。また中国の歴史教科書における日中戦争などをめぐる記述の変化、制度的な変遷、研究動向の変容などを調査し、それに必要な資料を収集する。

(3)歴史認識に関する研究会・ワークショップなどの開催

このような史料調査やインタビュー結果に基づいて、中国側と事例研究をおこない、中国側との歴史認識問題に関する対話のプラットフォームの構築に努める。具体的には、中国社会科学院近代史研究所(華北関係)、南京第二歴史档案館(日系企業日本語文書)、南京大学、復旦大学(汪政権関連)、中山大学(海南島関係資料)等と研究協力体制を築く。すでに社会科学院、第二歴史档案館、南京大学との研究交流を進める。

これらの調査活動と事例研究を積み重ねた成果を国際会議において公表し、日中歴史認識をめぐる問題の対話のプラットフォームを構築する。

4. 研究成果

2007年度及び2008年度に、4回にわたる国際学術シンポジウムおよびワークショップ、5回の研究会を開催した。

(1)本研究の総括・研究成果報告会として位置づけられる国際シンポジウムを2008年12月6日、7日に開催した。

2007年にこのプロジェクトを立案、実現した故・小島朋之慶應義塾大学教授が日中歴史認識問題について、「日中関係は現在、近年

来きわめて稀な「風」の状態にあり、日中歴史認識問題にとっては、初めて対話が可能な環境を作り上げることが可能になった」とし、現在の「稀なる好機」と表現したことを踏まえたように、政府レベルや民間レベルで多種多様な共同研究がおこなわれ、この複数の成果が世に問われた時期に本国際シンポジウムは開催された。

小島教授の他界後、本研究は、その意思を受け継ぎつつ、対話の基礎となる史料の調査、またその解釈をめぐる対話を中国側とおこなうなかで、問題の所在を探究してきた。その暫定的な成果を示し、また広く議論をおこなうべく、本国際シンポジウムは企画された。

本国際シンポジウムでは、第一に実証研究のレベルで何が問題となるのか、第二に歴史認識問題がいかに形成されてきたのか、第三に歴史共同研究を実際におこなう上での問題点はどこにあるのか、そして第四に国家史を超えていく可能性はあるのか、といったことについて、議論した。

本国際シンポジウムは、単純な実証研究報告でも、また歴史認識問題を議論するだけのフォーラムでもなく、両者を結合させながら、歴史研究と歴史認識問題の双方をともに議論する場を形成することを試み、一定の成果をもたらした。

(2)上記(1)に示した国際シンポジウムの開催に向けた研究活動および関連する研究活動として、国際シンポジウム、国際ワークショップおよび国内研究会を下記のとおり開催・共催した。

国際シンポジウム

・2008年7月30日「中日歴史資料の開放と中国近代史研究学術シンポジウム」(於、廈門大学人文学院歴史系)。報告は以下のとおりにおこなわれた。

第1部 廈門大学所蔵末次資料と末次研究の成果

- ・何小敏(廈門大学人文学院大学院生):「廈門大学図書館の『末次資料』を保蔵する経緯と資料分析」
- ・張侃(廈門大学人文学院准教授):「『末次資料』に見られる中日両国の債務関係」
- ・王雪萍(関西学院大学常勤講師):「末次研究所と末次政太郎」
- ・コメンテータ:加藤陽子(東京大学人文社会系研究科准教授)

第2部 歴史史料と中国近代史研究

- ・家近亮子(敬愛大学国際学部教授):「蒋介石日記の公開状況と資料的価値について」
- ・川島真(東京大学総合文化研究科准教授):「日本における廈門史関連研究と関

連史料の所蔵状況」

- ・コメンテータ:連心豪(廈門大学人文学院教授)

・2009年1月9日「中日学者“蒋介石研究”工作坊」(於、浙江大学人文学院蒋介石与近现代中国研究中心)。報告は以下のとおりにおこなわれた。

- ・家近亮子(敬愛大学):1937年12月の蒋介石 - 従《蒋介石日記》解読南京形成
- ・方新徳(浙江大学):蒋介石日記中の故郷情結
- ・川島真(東京大学):近年日本蒋介石研究の動向と成果
- ・肖如平(浙江大学):寧粵対立と蒋介石第二次下野
- ・劉大禹(浙江大学):論蒋介石個人權威形成的制度因素
- ・加藤陽子(東京大学):在中日戦争初期(1937年7月-38年12月)の政戦略 - 日本近代史研究的観点

・2009年3月9日“New Evidence to Understand the 20th Century China Japan Relations”(於、Polish Room (LHH, 2nd Floor), Hoover Institute, Stanford University)。報告は以下のとおりにおこなわれた。

- ・Ryoko Iechika, Professor, Department of International Studies, KEIAI University
- ・Shin Kawashima, Associate Professor, Graduate School of Arts and Science, The University of Tokyo;
- ・Xueping Wang, Instructor, KANSEI GAKUIN University Language Center;
- ・Madoka Fukuda, Lecturer, Department of International Studies, School of Humanities and Culture, TOKAI University.

国際ワークショップ

・2008年3月8日「国際ワークショップ:日中米における満鉄関係資料等の利用と保存をめぐる諸問題」(於、日本国際貿易振興機構アジア経済研究所)(日本貿易振興機構アジア経済研究所との共催)。報告は以下のとおりにおこなわれた。

- ・伊東英一(米国議会図書館アジア部レファレンスライブラリアン)「米国議会図書館における満鉄資料の整理と保存状況」
- ・魏海生(中国中央編訳局副局長、中国近現代史料学会副会長)「『中国館蔵満鉄資料聯合目録』編纂の意義と今後の課題」

- ・ 泉沢久美子（日本貿易振興機構アジア経済研究所図書館）「デジタルアーカイブス『近現代アジアのなかの日本』：植民地関連資料の情報ポータルとしての今後の役割」
- ・ 成瀬さよ子（愛知大学豊橋図書館）「愛知大学東亜同文館蔵書資料のデータベース化について」
- ・ 平井孝典（小樽商科大学百年史編纂室）「小樽高等商業学校の教育研究活動と植民地関係図書資料」
- ・ 白岩一彦（国立国会図書館）「日本国内における満鉄文書の所蔵状況」

コメンテータ

- ・ 村井哲郎（新潟大学大学院現代社会文化研究科）
- ・ 川島真（東京大学大学院総合文化研究科）
- ・ 小島浩之（東京大学経済学部）

・ 2009年2月1日「戦後東アジア国際政治史の研究展望」（於、熊本学園大学）（科学研究費（基盤研究B）「東アジアにおける「冊封・朝貢」の終焉とその記憶の形成過程」（研究代表者：川島真）科学研究費＜若手研究スタートアップ＞「建国初期中国の冷戦外交と日本」（研究代表者：大澤武司）との共同開催）。報告は以下のとおりにおこなわれた。

第1セッション「戦後東アジアの政治発展、経済発展におけるアメリカ要因の再検討」
司会佐橋亮（東京大学特任助教）
報告松田春香（東京大学大学院）、石川誠人（立教大学助教）、高木祐輔（慶應義塾大学大学院）玉置敦彦（東京大学大学院）

第2セッション「戦後日中関係史の再検討（1945年～1972年）一次史料の活用による通史へのチャレンジ」
司会横山宏章（北九州市立大学大学院教授）
報告大澤武司（熊本学園大学専任講師）、杉浦康之（慶應義塾大学大学院）、井上正也（神戸大学大学院）、神田豊隆（東京大学大学院）

第3セッション「台頭する中国の源流を求めて 鄧小平の決断」
司会大澤武司（熊本学園大学専任講師）
報告：下野寿子（北九州市立大学准教授）「鄧小平の対外開放 経済発展と国際化への歩み」、磯部靖（長崎外国語大学准教授）「改革・開放政策の展開と鄧小平のリーダーシップ 中央・地方関係を事例として（仮）」、益尾知佐子（九州大学大学院准教授）「鄧小平にとっての『日本』 反覇権闘争、現代化、愛国主義」
討論者

- ・ 横澤泰夫（熊本学園大学特任教授）
- ・ 川島真（東京大学大学院准教授）
- ・ 加茂具樹（慶應義塾大学准教授）

国内研究会

・ 2007年8月27日に、第1回研究会（於、慶應義塾大学）を開催した。「中国社会科学院近代史研究所図書館所蔵史料調査報告」（家近亮子）についての報告があった。

・ 2007年10月12日に、第2回研究会（於、慶應義塾大学）を開催した。「『蒋介石日記（～1945）』の利用・公開状況とその可能性 スタンフォード大学史料 調査報告」（家近亮子、川島真）および、外部講師より「『引揚げ資料』に関する報告」について報告があった。

・ 2007年12月4日に、第3回研究会（於、慶應義塾大学）を開催した。郭岱君（Tai-chun Kuo・スタンフォード大学フーバー研究所・研究員を招聘し、公開ワークショップの形式で開催した。「スタンフォード大学所蔵蒋介石日記と関係史料 その公開状況と意義」と題する報告がおこなわれた。

・ 2008年2月22日に、第4回研究会（於、慶應義塾大学）を開催した。「日中戦争史研究の現在」（加藤陽子）、および「1950年代に日本から帰国した留日学生・華僑についての調査報告」（王雪萍）についての報告があった。

(3) 閲覧不能となる可能性の高い資料、朽ち果てる可能性のある文書をマイクロフィルムでの保全を視野に入れながら、緊急的に中国に所在する史料の現状を把握し、その調査および収集をおこなう必要性から、日中歴史認識問題に関連する史料調査をおこなった。

- ・ 2007年8月20日に実施。研究報告4「中国社会科学院近代史研究所図書館 調査報告書」（家近亮子）
- ・ 2007年9月7日から12日に実施。研究報告3「広東省における日中戦争関連史料 - 広東省档案馆を中心に -」（川島真）
- ・ 2007年9月19日から27日に実施。研究報告1「『蒋介石日記（～1945）』の利用・公開状況とその可能性 スタンフォード大学（Stanford University）史料調査報告」(1)（家近亮子）
- ・ 2007年9月23日から30日に実施。研究報告2「『蒋介石日記（～1945）』の利用・公開状況とその可能性 スタンフォード大学（Stanford University）史料調査報告」(2)（川島真）
- ・ 2007年11月19日から27日に実施。研究報告5「中国外交部档案馆・北京市档案馆・旅日華僑・留学生聯誼会等調査報告書」（王雪萍）

(4)日中戦争関係者に関するインタビューをおこなった。

日中戦争を闘った中華民国国軍兵士に対するインタビューをおこなうにあたり、台湾において主に海軍史の研究者として知られている張力教授(国立東華大学歴史学系教授)の示唆を受けて、すでに公刊されている軍人に対する聞き取りについての報告書を取りまとめた。これによって、これまで全体像がなかなか把握できなかった、中華民国国軍の軍人に対するオーラル・ヒストリーの状況が把握できるようになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計46件)

1. Shinichi Kitaoka, The Political Tug of War and National Security Policy, Japan Echo, vol.35, no.1, 2008, 25-32, 査読無。
2. 家近亮子, 1937年12月の蒋介石「蒋介石日記」から読み解く南京情勢、近代中国研究彙報、第30号、2008、1-18、査読有。
3. 川島真, 日中戦争期における重慶発ラジオ放送とその内容、日中戦争再論(『軍事史学』)第43巻第3・4合併号、2008、377-393、査読有。
4. 川島真, 日露戦争と東アジア世界、日露戦争における中国外交 - 満洲における局外中立、2008、77-100、査読有。
5. 服部隴二, 殷燕軍著『日中講和の研究 戦後日中関係の原点』、史学雑誌、第117編第1号、2008、61-68、査読無。
6. 加茂具樹, 国際総生産世界第三位の中国、東亜、500、48-56、2008年、査読無。
7. 加茂具樹, 経済危機克服の尖兵は広東に、東亜、499、38-47、2008年、査読無。
8. 加茂具樹, 政権が直面する「信心」問題、東亜、498、46-55、2008年、査読無。
9. 加茂具樹, 金融危機のなかの温家宝訪米、東亜、497、44-53、2008年、査読無。
10. 加茂具樹, 華国峰の死去と改革開放30年、東亜、496、54-61、2008年、査読無。
11. 加茂具樹, 五輪は中国をどう変えるのか、東亜、495、42-52、2008年、査読無。
12. 加茂具樹, 五輪を迎える準備はできたか、東亜、494、34-45、2008年、査読無。
13. 加茂具樹, 破冰・融氷・迎春・そして暖春、東亜、493、46-60、2008年、査読無。
14. 加茂具樹, 改革開放30周年と「解放思想」、東亜、492、46-56、2008年、査読無。
15. 加茂具樹, 民主推薦された人代と政協幹部、東亜、491、46-56、2008年、査読無。
16. 加茂具樹, 北京五輪を前に厳しい訓練、東亜、490、52-63、2008年、査読無。
17. 加茂具樹, 『冰封』中国の過熱する経済、東亜、489号、2008、56-57、査読無。
18. 加茂具樹, 胡錦濤は『核心』となるのか?、東亜、488号、2008、40-49、査読無。
19. 加茂具樹, 九年越しに来日が実現した深セン号、東亜、487号、2008、46-57、査読無。
20. 加茂具樹, 胡錦濤政権と人民「秩序ある政治参加」のゆくえ、Ratio、5、98-113、2008年、査読無。
21. 北岡伸一, 分岐点の日本、外交フォーラム、21(11)、8-15、2008年、査読無。
22. 北岡伸一, 主要国間協調の時代における日本の責務、中央公論、124(2)、106-115、2008年、査読無。
23. 川島真, 中国近代史から考えるポスト官僚支配、週刊朝日、113(22)、22、2008年、査読無。
24. 川島真, 挑戦者から擁護者へ - 二一世紀国際秩序と中国外交、外交フォーラム、21(5)、28-31、2008年、査読無。
25. 川島真, 特集よせて 中国を見るための座標軸、Ratio、5、10-19、2008年、査読無。
26. 川島真, 「歴史」という資源とガバナンス - 日中間の難題を解くために、Ratio、5、144-161、2008年、査読無。
27. 川島真, チベット問題と1950年代の国際関係 - 1959年のチベット解放/侵攻をめぐる、中国研究月報、62(8)、25-37、2008年、査読無。
28. 川島真, 未完のオリンピック - 過去と未来の分水嶺になるか、中央公論、123(10)、112-119、2008年、査読無。
29. 川島真, マラウイの対台湾断交 - 背景・経緯・結果、問題と研究、37(4)、111-136、2008年、査読無。
30. 服部隴二, 歴史認識問題、歴史と地理、614、39-42、2008年、査読無。
31. 北岡伸一, 日中歴史共同研究の出発、外交フォーラム、226、2007、14-20、査読無。
32. 北岡伸一, 小沢安保保健論と『分断政治』の行方、中央公論、122、2007、90-101、査読無。
33. 加藤陽子, 岩波講座 憲法6 憲法と時間、大日本帝国憲法下の戦争指導、2007、75-100、査読無。
34. 加藤陽子, 興亜院設置問題の再検討、戦間期の東アジア国際政治、2007、439-499、査読無。
35. Kato Yoko, What Caused the Russo-Japanese War --- Korea or Manchuria?, Social Science Japan Journal, Vol.10, No.1, 2007、95-103、査読有。
36. 川島真, 日本占領期華北における留日学生をめぐる動向、中国研究月報、Aug 61、2007、4-18、査読無。
37. 服部隴二, 後藤春美、上海をめぐる日英関係1925-1932年 日英同盟後の協調と対抗、西洋史学、第225号、2007、82-84、査読無。
38. 服部隴二, 歴史研究が現代外交にもたらすもの、論座、第148号、2007、60-65、査読無。
39. 加茂具樹, 『民主推薦』された新しい『中央の領導集団』、東亜、486号、2007、46-55、査読無。

40. 加茂具樹、『科学的発展観』の新しい担い手、東亜、485号、2007、46-54、査読無。
41. 加茂具樹、残る『科学発展観』と消えた『和諧社会』、東亜、484号、2007、50-59、査読無。
42. 加茂具樹、雪花が舞う北京と胡錦濤政権、東亜、483号、2007、42-53、査読無。
43. 加茂具樹、十七回党大会にむけて動き出した政局、東亜、482号、2007、42-53、査読無。
44. 加茂具樹、社会主義民主政治の建設と『民主』、東亜、481号、2007、42-53、査読無。
45. 加茂具樹、日中の『氷』は融けたのか、東亜、480号、2007、50-65、査読無。
46. 加茂具樹、十七回党大会にむけた環境の整備、東亜、479号、2007、38-52、査読無。

〔学会発表〕(3件)

1. 服部龍二、日本の大陸拡張政策と中国国民革命運動、日中歴史共同研究、2007年11月24日、九州大学。
2. 川島真、A Comparison of Image toward China between Japan and Korea : A basic survey and preliminary consideration、日本政治学会、2007年10月7日、明治学院大学。
3. 家近亮子、走向遠東国際軍事法廷の政治過程と日本の法廷報道(1946-1948)、“一九四〇年代的中国”国際学術討論会、2007年8月18日、中国社会科学院。

〔図書〕(計16件)

1. 北岡伸一、慶應義塾大学出版会、日本の世界貢献とシヴィル・ソサエティ：慶應義塾大学法学部・沢栄一記念財団寄附講座、2008年、240。
2. 家近亮子、慶應義塾大学出版会、慶應の政治学：慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集地域研究、2008年、1-36。
3. 川島真、山川出版社、資料で読む世界の8月15日、2008年、230。
4. 川島真、東京大学出版会、1945年の歴史認識「終戦」をめぐる日中対話の試み、2008年、300。
5. 川島真、日本評論社、中国内外政治と相互依存、2008年、487。
6. 川島真、慶應義塾大学出版会、現代アジア研究1、2008年、415-442。
7. 服部龍二、吉川弘文館、人物で読む近代日本外交史：大久保利通から広田弘毅まで、2008年、316。
8. 服部龍二、吉川弘文館、人物で読む近代日本外交史：近衛文麿から小泉純一郎まで、2008年、340。
9. 服部龍二、中央公論新社、広田弘毅、2008年、296。
10. 服部龍二、中央大学出版部、『王正廷回顧録 Looking Back and Looking Forward』、2008年、208。
11. 北岡伸一、中央公論新社、国連の政治力学：日本はどこにいるのか、2007、301。
12. 家近亮子、晃洋書房、岐路に立つ日中関係

- 過去との対話・未来への模索、2007、318。
13. 加藤陽子、岩波書店、満州事変から日中戦争へ、2007、242。
14. 川島真、山川出版社、中国の外交 - 自己認識と課題 -、2007、240。
15. 川島真・服部龍二編、名古屋大学出版会、東アジア国際政治史、2007、387。
16. 服部龍二・土田哲夫・後藤春美編、中央大学出版部、『戦間期の東アジア国際政治』、2007、615。

〔その他〕

ホームページ等

「中国における対日歴史認識及び歴史研究動向に関する緊急調査」

<http://www.kojimatomoyuki.com/index.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

加茂具樹 (KAMO TOMOKI)
慶應義塾大学・総合政策学部・准教授
研究者番号：30365499
(2008年度)
(2007年度 研究分担者)
小島 朋之 (KOJIMA TOMOYUKI)
慶應義塾大学・総合政策学部・教授
研究者番号：00153536
(2007年度)

(2)研究分担者

北岡 伸一 (KITAOKA SHINICHI)
東京大学・大学院法学研究科・教授
研究者番号：80120880
家近 亮子 (IECHIKA RYOKO)
敬愛大学・国際学部・准教授
研究者番号：10306392
加藤 陽子 (KATO YOKO)
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号：90218321
川島 真 (KAWASHIMA SHIN)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：90301861
服部 龍二 (HATTORI RYUJI)
中央大学・総合政策学部・准教授
研究者番号：80292712
一谷 和郎 (ICHITANI KAZUO)
中部大学・人文学部・講師
研究者番号：80460533
王 雪萍 (WANG XUEPING)
関西学院大学・言語教育研究センター・講師
研究者番号：10439234

(3)連携研究者

なし